

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A Study on the use of Nihonkango in the Korean Language in the late 19th century : Focusing on forms of Kango which were the same in Japan and Korea

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 元哉, CHANG, Won jae メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002044

19世紀末の韓国語における日本製漢語

—日韓同形漢語の視点から—

張 元 哉

(東京都立大学大学院)

キーワード

19世紀末, 日韓語彙交流, 同形の比率, 日本製漢語

要 旨

現代韓国語において、日韓同形漢語が多いことの理由の一つに、近代以降、多量の日本製漢語が韓国語に取り入れられたことがあげられている。しかし、近代語におけるその実態は明らかにされていない。本稿は、日韓語彙交流史の19世紀末に焦点をあて、同形漢語や日本製漢語の実態を調査したものである。

1895・6年の『国民小学読本』(近代最初の国語教科書)と、『独立新聞』(近代最初の民間新聞)における漢語(3621語)のうち、同時期の日本語の資料に見られる同形漢語は、2393語で66.0%を占めている。そのうち、同義である2290語の各語において中国・日本・韓国の資料を調べ、それぞれの用例の有無を確認し、出自の判断を行った。その結果、日本製漢語と思われる語は、229語であり、10%を占めていることが明らかになった。

1. はじめに

漢字文化圏である中国・日本・韓国には、古くから人的・物的・言語的交流があった。特に近代以降の三国の言語的交流は各々の現代語の形成に大きく影響している。幕末・明治以降、西洋の新文明・文物を受け入れ始めた日本は、さまざまな方法によって多くの日本製漢語¹を作り始めた。幕末・明治以降の日本製漢語は中国・韓国にも受け入れられることになり、特に韓国にはおびただしい語彙が入った。

日韓語彙交流を史的観点から問題にするとき、時期を次のように分けることができる。

まず、日本に対して韓国が開港した1876年を基準に大きく以前と以後に分けられる。1876年以前は日本語の接触期で、朝鮮時代に日本に派遣した通信使の日記類や日本語教科書類にその例が若干見られるが(宋敏(1985)²)、定着するまでに至らなかったようである。ところが、1876年以後になると、政治的・文化的な背景により1876年以前とは違って、本格的に日本語が入り定着するに至る。また、この時期は、さらに三つの時期に細分される。

第1期：日本に対して韓国が開港した1876年から日韓併合1910年まで

日本に対して開港した朝鮮朝廷は、1876年以前より多くの通信使を日本に派遣した。その通信使らは新文明・文物を受け入れ変貌している日本を見物し、間接的に新文明・文物に接するようになった。その記録物には、新漢語・日本製漢語が散見できる(宋敏(1988), 李漢燮(1998))。1894

年以降になると、日本への留学生が帰国し著作物を刊行した。その著作物には日本製漢語が数多く見られる。李漢燮(1985 a)は兪吉浚の『西遊見聞』において福沢諭吉の影響が見られることを確認し、日本製漢語を実証的に明らかにしている。

1905年には日本が韓国を保護国化し、翌年1906年に日本によって韓国に統監府が設置される。同年8月には「普通学校令」が発せられ、普通学校の教科目に日本語が必須科目になる。

第2期；1910年から1945年まで（日韓併合期）

第1期が日本語との間接的な語彙交流であるのに対して、この時期は直接的な交流があった時期である。1911年には「第1次朝鮮教育令」が發布され、その条文に「国民」「国語」が多用されるが、それぞれ「日本の国民」「日本語」の意味で使われるようになる。1938年の「第3次朝鮮教育令」には朝鮮語が随意科目となり、それ以降は学校での韓国語の教育や使用が禁じられ、一般民衆に対して日本語を常用させた。この状況で日本語が韓国語に流入するのは必然的であろう。

熊谷明泰(1991)はこの時期の雑誌を調べ、日本語が韓国語に定着した様子を明らかにしている³。また、李漢燮(1984 b, 1985 b)は、和語・混種語がどの時期から韓国の資料にみられるかを調べ、主に第2期に多く入っていることを明らかにした。これは日本語流入の背景と関連がある。漢語は主にものや本などを通して受け入れたのに対して、和語・混種語は直接的な日本語教育を通して受け入れたからである。

第3期；1945年以後

第2期までの事情によりいろいろな分野に溶け込んだ日本語を取り除くために、1945年以降、「国語醇化運動⁴」が行われた。出自が日本語として意識される、多くの和語・日本経由の外来語⁵は、この運動によってなくなったが、その一方で、日本出自の意識が希薄な漢語については、依然として受け入れられている。鄭大均(1993)によると、日本語で書かれた世界文学全集、法律、教科書などがそのまま韓国語に翻訳される方法で大量の日本語が入り続けているという。

このように第1～3期にわたって韓国語にはおびただしい日本語が入ることになった。和語・外来語などは第3期の運動によって排除されたものの、漢語のほうは多く使われ続けている。その日本製漢語が現代韓国語に少なからぬ影響を与えていることは言うまでもない。

ここで日韓現代語の漢語を対照した調査についてまとめてみると次の表1になる（ここで同形語は日韓において漢字の字面が同一のものを、同義語はその意味が大体同じものをいう）。

李漢燮(1984a) 曹喜澈(1991) 宋永彬(1993)は基本語を、塩田(1999)は専門用語・新語を対象としたものであるが、これらの調査から現代日韓漢語の一致率は80%後半～90%台であり、日中・韓中の一致率に比べ高いことがわかる。

このように日韓における漢語の一致率が高い理由⁶として、近代以前、日韓ともに中国から漢字・漢語を受け入れたことがあげられるが、特に近代以降の日韓の語彙交流が現代韓国語における語彙の形成に大きな影響を与えており、両者の類似性を高くしていると思われる。現代韓国語における日本製漢語の数は未だ調査されておらず、現段階ではわからないが、李漢燮(1984a)の調査では、同形語2635語⁷のうち、1010語（38.33%）の日本製漢語があると指摘している。対象語が基本語であることからその影響が強いことが推測できる。また、張元哉(2000)は日本製漢語が韓国語に

入ることによって、異形の漢語から同形の漢語へ、異義の漢語から同義の漢語へと変わる様子を
確認している。

その一方、韓中は、近代以降は近代以前に比べて交流が少なく、韓国も中国もそれぞれむしろ
日本との交流が中心になった。また、日中は中国が日本製漢語を受け入れつつ、一方で西洋文明
を取り入れる際に中国独自の造語や語の代替を行った。そうした背景により、日韓よりも日中・
韓中の一致率は低くなっているものと思われる。

表 1

先行文献	対象とした資料	語 数	同形語	同形語のうち 同義語
李 漢 燮 (1984a)	『日本語教育基本語彙七種比較 対照表』	2604 語	日韓 2450 (94.08)	2418 (98.69)
曹 喜 淑 (1991)	『漢字音読語の日中対応』	1882 語	日韓 1659 (88.15)	1573 (94.81)
			日中 1364 (72.47)	1215 (89.07)
宋 永 彬 (1993)	日韓の小学校全課程の国語教 科書	3280	日韓 2759 (84.11)	
塩 田 (1999)	言語学用語	日韓中 共通立項 項目 674	日韓 465 (69.0)	
	日本：『新言語学辞典 改訂増 補版』1975 研究社		日中 123 (18.2)	
	韓国：『改訂増補版 言語学辞 典』1987 博英社		韓中 112 (16.6)	
	中国：『英漢語言学詞彙』1979 新華書店北京発行所			
	現代用語	日韓共通 立項項目 672	日韓 578 (86.0)	
	日本：『現代用語の基礎知識 1993』1993 自由国民社			
	韓国：『93 現代知識情報事典』 1992 中央日報社			

今まで述べたように、日韓語彙を把握する上で語彙交流の問題を積極的に捉える必要があり、
交流の問題を解決するためには、多くの日本製漢語の認定を明確に行うことが不可欠である。

そこで、本稿は、日韓の語彙交流史の上で、本格的に日本製漢語が入って定着した時期、第 1
期を対象に、同形漢語を調査し、各語の出自の認定を行う。第 1 期は日韓において語彙交流の初
期の段階であり、次の時期の交流問題の解明にも重要である。19世紀末における次の 2 点を調査
目的とする。

- ・19世紀末の日韓において同形漢語の比率はどうであったか。
- ・19世紀末の資料にどのような、どのくらいの日本製漢語が入っていたのか。また、どのよう
な受け入れ方をしたのか。

2. 調査資料の選定と範囲

1) 調査資料の選定と背景

日韓語彙交流史において、第1期が多くの日本語を受け入れ始めた時期であることは、先に触れた。特に甲午更張（1894）以降は、語彙交流の量的な程度が一層高くなったといえる。その文化的な背景として以下の2点をあげる。

①甲午更張による学制改革

近代式の学校の設立は、1886年に私立学校である「培材学堂」と「梨花学堂」が、また、同年、政府による「育英公院」が最初である。これらが韓国の開化運動に大きい影響を与えたのは言うまでもないが、教科目が偏っており、授業に用いた教科書は教師が作ったものによらざるを得なかったことも事実である。しかし、1894年になると、学制改革が行われるようになり、1895年に小学校、師範学校が次々と設立された。このような状況から生じた必要性に応じて、近代最初の教科書である、『国民小学読本』（1895）が学部（日本の文部省にあたる）によって編纂されることになったのである。

②日本の留学生の啓蒙活動や著作物

1881年に兪吉浚が韓国の留学生として始めて日本に来て以来、韓国留学生の数はだんだん増加し、1910年には700名にも達したという⁸。これらの留学生は、韓国の開化運動に大きな役割を果たした。また日本の留学生による著作物には多くの日本語が入っている。代表的な人物の著作物を見てみると、

兪吉浚（ユキルジュン）の『西遊見聞』（1895）⁹、徐載弼（ソジェピル）の『独立新聞』（1896.4から）、崔南善（チェナムソン）の『少年』（1908）

などがある。

このうち、背景の①を反映したものとして『国民小学読本』を、②を反映したものとして『独立新聞』を選んだ。この二つは、ともに a この時期の中でも出来るだけ早い年代（1894年に近い）の資料、b 当時の語彙をよく反映し多くの分野にわたって書かれた資料、c 多くの人々に読まれ国民への普及の面で大きな影響力を与えたと思われる資料として位置づけられる。

2) 調査資料の紹介と範囲

①『国民小学読本』¹⁰（以下、『国』とする。）

1894年以降、学制は近代的な体制に整えられるようになる。その必要性に応じて、1895年に編纂されたものである。『国』の編纂の経緯¹¹を見ると、全知識人が参加したようである。当時の知識人は日本への留学生が多く、日本についての知識を持っていた人が多かったことから、日本製漢語の受け入れの背景が伺える。

この教科書は全1巻41課（144頁）で構成されており、漢字ハングル文で書かれている。

『国』の内容を、主題別に示すと、41課のうち、倫理（5課）、教育（16課）、社会（1課）、商業（2課）、地理（1課）、歴史（6課）、科学（10課）となる¹²。西洋文明・文物について多くのページを割いている。例えば、課の題を見ると、

第6課：商事及交易、第7課：植物変化、第10課：時計、第11課：駱駝、第14・15課：倫敦

一・二、第16課：風、第18課：蜜房、第20課：錢、第21課：紐約、第23課：鯨鯨、第27・28課：가을 드ー二、第29・30課：氣息一・二、第31・32課：亜米利加發見一・二、第36課：鰐魚、第37課：動物天性、第38課：合衆国鉞業、第39課：元素

などが、西洋文明・文物にかかわっていることがわかる。本資料においては、志部(1987)も指摘したように日本製漢語を多く見つけることができる。

②『独立新聞』¹³ (以下、『独』とする。)

まず、『独立新聞』を創刊した徐載弼(ソジェピル)について若干紹介しておく。

徐載弼は1883年日本留学生に選ばれて、同年5月に日本に来た。最初の6ヶ月間は慶応義塾に入って日本語を学び、同年11月戸山陸軍学校に入学した。1884年7月、1年2ヶ月ぶりに帰国した。後に渡米しジョージ・ワシントン大学で医学を学び、医師になった人でもある。帰国後、『独』を創刊し啓蒙活動家として活躍した。このように西洋文明・文物に広い知識をもって執筆した『独』には多くの日本製漢語が入っていたと思われる。

この資料は、1896年4月7日に発刊され1899年12月に閉刊された韓国最初の民間新聞である。『独』は、4面のうち、3面がハングル文、1面が英文となっており、隔日刊でハングル表記されている。『独』の構成は、論説、官報、外国通信、雑報、広告、物価などの本文(1・2面)と広告欄(3面)からなっている。その中で一番多い紙面を占めるのは論説や雑報である。本文全体の約2/3を占めている。

『独』の発行部数は定かでないが、徐載弼の回顧録によると、最初には300部くらいで少なかったが、実際購読者が新聞を読んだ後に人々に回して読んだりして、新聞一枚で200人以上は読まれており、また、市場などで朗読したりした¹⁴、ということから多くの人々に読まれたと思われる。

今回調査範囲としたのは1896年4月7日～6月30日までの37日分で、全数調査を行った。ただし、官報や歌の部分は調査対象外とした。官報は量も少なく、固有名詞がほとんどであるからである。

1896年6月30日までにした理由は論説の内容によるものである。雑報が日常生活における出来事の記事であるのに対し、論説は国民に対する啓蒙の内容を持ち、多くの分野にわたって書かれている。『独』における論説の主題の内容を分野ごとに示すと、教育(40%)、政治(38%)、産業・経済(8%)、倫理(8%)、文化・芸術(3%)、社会(3%)¹⁵となるが、全主題の記事が揃った時期が6月30日までなのである(()は4月から6月までの論説の主題の割合)。

3. 近代における同形・同義漢語

3.1. 調査方法

1) 漢語の抽出

韓国の資料に出現した漢語を抽出する。ただし、一字漢語や数字、音訳語、固有名詞などは調査対象から除外する。

除外の例)「三／四／朔」(数字)、「亜米利加」「亜非利加」(音訳語)、「집(家)／大門」「가메야／会社」(固有名詞の例)

そのうえで、2字以上の漢語を抽出する。そこで得られた漢語を次の原則によって単位に区切る。

(原則1) 3字漢語は原則的に切らないで一単位語にする。

例外)

a 数字がついたものは切る。

「三／大洲」「三／大隊」, 「二／大帝国」(4字漢語) など

b 並立されている語は切る。

「欧／亜／米」「農／工／商」, 「牛／羊／馬／鹿」(4字漢語) など。

c 連体詞と認められるものはその後で切る¹⁶。

「各／学校」「各／宮内人」(4字漢語)「各／官立／学校」(5字漢語)「旧／学校」「諸／半球」

「新／化合物」(4字漢語)「前／大臣」「本／裁判所」「本／郡主」「両／船将」など。

(原則2) 4字以上の漢語は原則的に切る。基本的に4字は「○○／○○」に、5字は「○○／○○○」「○○○／○○」に切る。

例外)

a 切ることによって意味が変わるものは切らない(一概念として考えられるものも含む)。

「万国公法」(国際法), 「一世一代」(一生), 「一朝一夕」(短い時間) など。

「師範学校」「全権公使」「総理大臣」「特命全権公使」「文明開化」など。

b 4字漢語は「○○／○○」のように切れないものは切らずに一単語とする。

「合衆国中」「銀行所票」「白大理石」など。

(原則3) 「愛国愛民하다」のように、「하다(する)」が「愛国」「愛民」にともに掛かる場合、「愛国／愛民／하다(する)」に切る。また、前の部分の4字全体が掛かる場合もこれに類するものとして同様に切る。

「一定／不動／하다(する)」「交通／貿易／하다(する)」など。

「政府／官員／中」「内外／国民／中」「貧富／貴賤／間」「世界／万国／中」など。

2) 日本資料との対照

1. 同形の判断

まず、韓国の資料である『国』と『独』から漢語抽出の方法によって得られた単位語の異なり語を整理する。

それらを『日本国語大辞典』(小学館, 以下『日国』とする)と照らし合わせ、項目の有無とその用例が幕末から1895年までにあるかを確認する。

項目および用例があるものは同形漢語として認める。しかし、項目がないものや項目の用例が幕末以前, もしくは1895年以降しかない場合は, 調査資料にあげた日本の資料(幕末~1895の文献)を調べ, 項目や用例の有無を確認する。それでも項目や用例がなかった場合, 同形漢語が存在しないものとする。

なお, 字体の問題は, 次のように処理した。

○新字体と旧字体

韓国では旧字体のみ使用するので、旧字体を新字体に直して同形漢語として判断する。

例)「醫藥」→「医薬」,「辭職」→「辞職」,「小學校」→「小学校」など

○「総」と「綜」

日本語では両字ともに字音が同じであり、「総合」「綜合」のように一緒に使う場合があるが、韓国では別字で字音も違う(「総」→「총」(chong),「綜」→「종」(jong))。そこで日韓においては別字とし、この字を含む漢語は同形漢語からはずした。同様の例として、「害」(「해」he)と「碍」(「애」e)などがある。

○日韓それぞれにおける国字

「働」のような日本の国字は「動」とは別字とし、それを含む漢語も別字に扱う。例えば、次の二つは同形漢語からはずす。

例)「労働」と「勞動」など。

2. 同義の判断

1で得られた日韓同形漢語について各語の意味を調査し、意味の異同を判断する。意味の異同を判断するためには、多くの用例に基づく詳細な分析が必要であるが、本稿では、一応次のような基準で判断した。

①『国』・『独』に現れた各語の意味を、韓国語は当時の対訳辞書・『우리말 큰사전』(ハングル学会、1992)を、日本語は当時の国語・対訳辞書と『日本国語大辞典』を参考に意味を対照する。

②『国』・『独』に現れる意味のほか、同時代に他の意味があった場合は、調査資料に現れた意味のみを対象とする。例えば、「発行」は、調査資料における意味は〈issue・publish〉のみであり、日本の『日国』や辞書類にも同意味の用例があるので同義漢語とする。韓国の対訳辞書『韓英辞典』(Gale, 1897)に〈出発する〉という意味の記述もあるが、この意味は調査対象としない。

③調査資料において二つの意味が現れる場合、両意味ともに日本の資料にあれば同義漢語とするが、二つの中で一つでも異なる場合は異義漢語に入れた。例えば、「発明」は、〈言い訳〉と〈Invention・Discovery〉のように二つ以上の意味で使われている。〈Invention・Discovery〉の意味は日韓同義になるが、〈言い訳〉の場合は日本の資料に見当たらないので、異義になる。つまり、一方が同義で他方が異義の場合、異義漢語に入れる。

以上のように語の意味は辞書的・明示的な意味によって判断した。その中には、日韓において一方の意味が広かったり、微妙な相違があった語もあるが、ここでは、例えば、「工夫」「放送」が韓国でそれぞれ〈勉強〉〈釈放する〉となるように、明らかに意味が異なるものを異義とみなすことにする。

3.2. 19世紀末における同形漢語

『国』と『独』との総異なり語数は3705語であるが、語形が判断できない語として84語があった。84語は、影印の状態の都合で見えない語、見えてもどういう漢字・漢語なのかわからない語、同音異義語の判断ができない語(『独』はハングルのみで書かれているので)などである。本稿は、判断できない84語を除いた3621語を調査の対象とする。

『国』と『独』における日韓同形や同義漢語は次のとおりである。表2は、『国』と『独』の全体の数値とその内訳を示した。表3は、各資料の数値を示したもので、表2のそれぞれ「各資料のみにある語」と「両方にある語」をプラスしたものである。

表2

	韓国資料における漢語	日本資料に見られるもの	
		同形漢語	同形漢語のうち、 同義漢語
全 体	3621 (100)	2393 (66.0)	2290 (95.6)
『国』のみにある語	1887 (100)	1237 (65.5)	1209 (97.7)
『独』のみにある語	1394 (100)	852 (61.1)	792 (92.9)
両方にある語	340 (100)	304 (89.4)	289 (95.0)

() 内は% (以下同)。

表3

	韓国資料における漢語	日本資料に見られるもの	
		同形漢語	同形漢語のうち、 同義漢語
『国』	2227 (100)	1541 (69.1)	1498 (97.2)
『独』	1734 (100)	1156 (66.6)	1081 (93.5)

上の表2・3から全体的な傾向として次のようなことがわかる。

- ①表2において資料の「全体」における同形の比率は66.0% (2393語) であり、各資料 (表3) の『国』『独』はそれぞれ69.1%、66.6%の数値を示している。
- ②各資料のみに出現する語の同形の比率 (表2) は、『国』のみにある語」では65.5%、『独』のみにある語」では61.1%である。一方、両方に出現する340語は全体3621語に対して9.38%を占めているにすぎない。新聞と教科書という資料の異質的な面を表しているのではないかとと思われる¹⁷。しかし、その異質な資料において共通する語彙は同形の比率が89.4%と高く、当時の基本語の性格を表していると考えられる。それは新聞 (『独』) より教科書 (『国』) の方が高い数値を示していることから同様に考えることができる。
- ③同義の比率はどの資料でも90%台で高い。

4. 日本製漢語の認定

それでは、日本資料に見られる同形同義2290語のうち、当時の韓国語に入った日本製漢語にはどのようなものがあり、その割合はどの程度のものだったであろうか。以下、各語の出自判断を行うが、それぞれ出自を確かかつ正確に判断するのはかなり難しい作業であり、おびただしい数の文献を調査しなければならない。ここでは4.1の方法と各国の基本的な資料の調査によって日本

製漢語の認定を行うことにする。

4.1. 各語における出自判断の方法¹⁸

2290語の出自の判断は次の方法によった。いくつかの具体的な例として30語を表4にあげることとする。日本製漢語らしさが強いものとして15語、中国製漢語らしさが強いものとして15語を選んだ。出自判断の主なパターンを説明するために、30語には、日本製漢語と思われる語、中国製漢語と思われる語（そのうち、『大漢和辞典』に用例がある語、そのほかの語）、出自判断を保留した語が入るように心掛けた。調査の結果、各パターンは、それぞれ14語、13語（5語、8語）、3語になる。用例は各パターンごとに五十音順に示す¹⁹。

①『大漢和辞典』—古代中国語の用例の有無の確認—用例があれば中国製に確定

各語を中国の出自かどうかを判断するため、中国古代文献の用例の有無を確認する。まず、資料として『大漢和辞典』（大修館、以下『大漢和』とする）を調査し、項目や用例の有無を確認する。項目があって、同じ意味の用例があるものは中国製漢語と判断する。

「愛玩 愛護 愛国 哀悼 悪鬼」は『大漢和』に同じ意味で用例があり、中国製漢語として認定する。

②『漢語大詞典』—古代以後の中国用例の確認—古い用例があれば中国製に認定し、初出が新しい場合は③へ

『大漢和』に項目や同意味の用例がない場合は、『大漢和』を補う資料として『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社、1986～94、以下『漢語大』とする）を調査する。同様に項目や用例の有無を確認するが、用例がある語は用例の初出年代を調査し、③の調査の段階で日本の用例を検討する。

『大漢和』に用例がなく、『漢語大』に用例がある語は、

遺骸 学院 化合 下層 議院 稀薄 全国 圧制 運動会 温度 会員 開戦 改良 学期 確定 官立 官報 吸収 教堂

である。これらの語の初出例を見ると、「遺骸 学院」を除けば、わりと新しい年代に現れている。用例が『大漢和』にも『漢語大』にもない語は、

欧州 英文 議事堂 医員 英語 液汁

である。これらの二つのグループは③以降の調査を行い検討する。

③『英華字典』・洋学書（中国）、『英和对訳袖珍辞書』・蘭学書・文学作品（日本）の確認—初出の時期を比較して中国製か日本製かを認定

中国資料として、『英華字典』（ロブシャイド、1866～1869、以下『英華』とする）や近代の中国洋学書²⁰を、調査する。同時に日本の資料として以下の文献の用例を調べ、意味や用例の有無を確認した。

蘭学書²¹、文学作品（『浮雲』『あひびき』等）、対訳辞書（『英和对訳袖珍辞書』（以下『袖珍』とする）『和英語林集成』（初版、再版、三版）『附音挿図英和字彙』（以下、『英和字彙』）、漢語辞書（『新令字解』『漢語字類』）、節用集・国語辞書（『早字引集』『言海』）、索引類、その他の文献など（『日

本資料」を参照)

②の調査や③の中国資料の調査から、項目がなく、意味が異なる語は、日本製漢語の候補として考える(「医員 液汁」)。そして、日中とも用例があるものは初出例の前後関係を見て、出自判断する。「遺骸 学院 欧州 英文 化合 下層 議院 議事堂」は、中国の例が早いので中国製漢語、「稀薄 全国 圧制 英語 運動会 温度 会員 開戦 改良 学期 確定 官立 官報 吸収 教堂」は、日本の例が早いので日本製漢語の候補として判断する²²。

ところで、ここで判断を保留したものがある。「稀薄」は『袖珍』と『英華』にともに現れる例として判断を保留とする(判断を保留する語のアを参照)。また、「全国」は日本の『玉石志林』(1855)と中国の『地球説略』(1856)との初出年があまり差がなく、その前後関係が確認できないものとして判断を保留した。

④韓国資料—③で日本製と認めたものについて調査—用例があれば日本製から除外

③で得られたものは日本製漢語である可能性が高い候補であるが、韓国にその日本製漢語が入ったことを証明するためには、日韓において交流を始めた1876年以前の韓国の資料に用例があるかどうかを調査しなければならない。次の韓国資料に同じ意味の用例がある場合は日本製漢語の候補からはずした。

『捷解新語』(1676), 『倭語類解』(1780年代), 『交隣須知』(19世紀前半), 『隣語大方』(1790) 南廣祐編(1997)『教学 古語辞典』教学社ソウル, 劉昌惇(1985)『李朝語辞典』延世大学校出版部ソウル, 韓国精神文化研究院(1995)『17世紀国語辞典上・下』太学社ソウル
『韓佛字典』(リーデル, 1880), 『韓英字典』(H. G. Underwood, 1890), 『English-Corean Dictionary』(J. Scott, 1891), 『韓英字典』(J. S. Gale, 初版1897), 『Korean words and phrases』(J. W. Hodge. 第二版1902), 『日韓いろは辞典』(柿原治郎, 1907), 『韓英字典』(J. S. Gale, 再版1911), 『An English-Korean Dictionary』(G. H. Jones, 1914), 『朝鮮語辞典』(朝鮮総督府, 1920), 『朝鮮語辞典』(文世榮編, 1938), 『우리말 큰사전』(ハングル学会, 1992), 『동아 세국어사전』(東亜出版社, 1997)

ところで、韓国資料の中で1880年の『韓佛字典』があるが、『韓佛字典』の著者であるリーデルは1866年に天主教迫害の難を逃れ満州の莊河に行き、1877年韓国に帰国する間に本書を編纂した²³, とされる。1876年以前の韓国の語彙を反映していると思われるので、項目や同じ意味がある場合は日本製漢語の候補からはずす。19世紀後半以前の韓国資料に用例がないものは日本製漢語である可能性が高い語として認める。

③の日本製漢語の候補とした語の中で「医員」以外の語は韓国の資料に現れないので日本製漢語と判断する。「医員」は『17世紀国語辞典上・下』, 『韓佛字典』(リーデル, 1880)に用例があり、日本製漢語の候補からはずれることになる。

以上の方法による出自判断の結果は次のとおりである。

●中国製漢語と思われる語

愛玩 愛護 愛国 哀悼 悪鬼 遺骸 学院 欧州 英文 化合 下層 議院²⁴ 議事堂

●日本製漢語と思われる語

圧制 英語 運動会 液汁 温度 会員 開戦 改良 学期 確定 官立 官報 吸収 教室

●出自判断を保留した語

医員 稀薄 全国

表 4

	中国の資料			日本の資料		韓国の資料
語	『大漢和』	『漢語大』	『英華』1866～1869・洋学書	『袖珍』1862	蘭学書・文学作品など	
愛玩	○					×
愛護	○					×
愛国	○					×
哀悼	○					×
悪鬼	○					×
遺骸	×	○洪邁『夷堅志癸・北塔院女子』宋	×	×	○『和英語林集成』1867	×
学院	×	○王建『贈田將軍』詩唐	○『英華』○『大美聯邦志略』1861	×	○『西国立志編』1871	×
欧州	×	×	○『六合叢談』1857	×	○『西国立志編』1871	×
英文	×	×	○『六合叢談』1857	×	○『郵便報知新聞』1877～1878	×
化合	×	○郭沫若(1892～1978)『洪波曲』	○『德国学校論略』1873	×	○『物理学術語和英仏独対訳字書』1888	×
下層	×	○『花月痕』1888	○『英華』	×	○『西国立志編』1871	×
議院	×	○鄭觀応(1842～1922)『盛世危言』	○『六合叢談』1857	×	○『西国立志編』1871	×
議事堂	×	×	○『地理全誌』1853～54	×	○『航米日録』1860	×
医員	×	×	×	×	○『徳川実記』1641	○『東国新統三綱行実図』1617
稀薄	×	○瞿秋白(1899～1935)『魯迅雜感選集』序言』	○『英華』	○	○『輿地誌略』1826	×
全国	×	○毛沢東(1893～1976)『致胡喬木』	○『地球説略』1856	○	○『玉石志林』1855	×
圧制	×	○楊沫(1914～)『青春之歌』	×	×	○『英和字彙』1873	×
英語	×	×	○『西学考略』1883	○	○『西洋事情』1866～70	×

運動会	×	○丁玲(1907～)『小火輪上』	×	×	○『当世書生気質』1885	×
液汁	×	×	×	○	○『英和字彙』1873	×
温度	×	○冰心(1900～)『姑姑』	×	○	○『英和字彙』1873	×
会員	×	○章炳麟(1868～1936)『巫州和親会約章』	×	×	○『文明論之概略』1875	×
開戦	×	○毛沢東(1893～1976)『清平楽・蔣桂戦争』詞』	×	×	○『経国美談』1883	×
改良	×	○徐特立(1877～1968)『公園設立管見』	×	○	○『玉石志林』1855	×
学期	×	○巴金(1904～)『家』	×	×	○『漢英対照いろは辞典』1888	×
確定	×	○巴金(1904～)『新生』	×	○	○『玉石志林』1855	×
宣立	×	○魯迅(1881～1936)『書信集』	×	×	○『特命全權大使米欧回覧実記』1877	×
官報	×	○魯迅『故事新編』1936	×	○	○『太政官達 22 号』1883	×
吸収	×	○巴金(1904～)『関于「長生塔」』	×	×	○『玉石志林』1855	×
教堂(教会の意味)	×	○『恨海』1906	○『西学考略』1883	×	○『公議所日誌』1869	×

①の『大漢和』の調査から中国製漢語と判断した語は、全体で1777語であった。残った513語を『漢語大』と③④の調査によって調査したところ、ここで中国製漢語と認定した129語は以下のようなもので、中国でも比較的新しい漢語が多い。表4においては『英華』や洋学書に用例が現れる語にあたる。中国の初出例が洋学書などにあり、宣教師らの造語である可能性が高い。これらの語は中国から日本を経由して韓国に入ったのか、それとも中国から直接韓国に入ったのかは、現段階では解明されておらず、今後の課題とする。

英文 学院 化合 下層 火輪船 議院 教会 告訴 国旗 最要 雜貨 商事 所産 新開
神父 訊問 征服 設立 全身 属地 炭酸など

また、出自の判断を保留とした語は155語ある。これらについては、これから多くの文献を調査し、詳細な考察をする必要がある。今後の課題とし、いくつか例をあげておくが、各語ごとに多くの問題点がある。

ア. 中国の『英華』と日本の『袖珍』の両方に用例が見つかるもの。

従来は『英華』に用例がある語は中国製漢語と考えられていたが、荒川(1997)によれば、『英華』にあっても日本製漢語と認められる語があるという(「半島」など)。ロブシャイドが訪日した際に『袖珍』を購入し、『英華』を編纂する時に『袖珍』を参考にした可能性があるからである。日本

の蘭学資料や中国の『英華』以前の英華辞書類を見る必要があるが、現段階ではそこまでできず、出自の判断を保留とする（10語）。

河馬 海狸 稀薄 結合 交換 交際 臭気 証人 紳士 領事官

イ. 調査資料における意味が中国古典の意味なのか日本製漢語の意味なのか、よく分からないもの（構造 学士 関係 自由 文化 相対など）。また、このほかに辞書や文献において意味が問題になって出自を保留とした語（通牒 確信 就学 正当 説明 旅装など）。

ウ. 英和・英華の対訳辞書において調査対象語の英語の項目がなく、用例があるのかないか、確認できないもの（英王 英兵 海程 挙示 小動物 富源など）。

エ. 「欧州中 機械中 空気中 元素中 法律上」など（13語）。これらのように接辞「～中・～上」を含む形は辞書に載っていない形であり、用例の有無を確認できない。また、特に日本の造語法でもないので判断を保留とする。

4.2. 日本製漢語

4.1 の調査方法によって、各語の出自を判断したのが次の表5である。

表 5

日本資料に見られる同義漢語	中国製漢語と思われる語	日本製漢語と思われる語	判断を保留した語
2290 語	1906 語	229 語	155 語
100%	83.2%	10.0%	6.8%

表5によって、19世紀末における同義漢語の出自の比率は、中国製漢語が83.2%、日本製漢語が10%を占めていることがわかる。「1 はじめに」で日韓同形漢語が多い主な理由として①と②の理由（注6）をあげた。これは出自の問題と関連があるが、必ずしも①の理由の場合は、この理由によって中国製漢語（83.2%）が入ったと解釈することはできない。中国製漢語、特に初出例が新しいものには、日本との交流によって韓国に入った語があるからであり、流入の経路の問題は今後の課題とする。ここでは、各語において出自の比率の実態を報告するに止まる。

ここで日本製漢語と判断した語をあげると次のとおりである。

『国』のみに出現する語：100語

（あ） 愛国心 印紙 液汁 温度

（か） 開戦 改良 化学者 各地 学科 含有 寄宿舍 紀元前 汽船 議員 距離 吸収
共和国 金属 激戦 血液 建設 建築 元素 古代 語学 公園 鉱物

（さ） 産出 酸素 司令官 資本 写真 社会 写出 重量 硝煙 消火 小学校 償金 小
戦 条約 条約書 蒸気車 植民地 書籍館 所長 数回 数多 水量 整然 政略 製
作所 製出 製鉄 船舶 占領 石灰石 戦端 船将

(た) 多数 多量 対等 炭素 短銃 断念 茶褐色 直航 通学 停車場 的例 適否 転学 転換 到達 時計 突進

(な) 熱国 熱度 農産

(は) 白墨 派遣 発見 氷塊 表面 副統領 物質 分隊 平均 米人 編成 放射 報酬 膨脹 捕鯨船

(や) 遊園 (遊園地の意味)

(ら) 羅針盤 理学 陸上 冷却 連隊

『『独』のみに出現する語』: 113語

(あ) 圧制 意見書 運動会 衛生 英語

(か) 会員 会社 海陸軍 下院 閣議 確定 学期 活版所 株式 火曜日 官許 簡単 官報 官立 官令 騎兵隊 競売 共和 教員 教堂 軍楽隊 軍艦 君権 軍服 訓令 刑事 警察官 月曜日 憲兵 検事 広告 広告文 公使館 校長 交番所 公立 国文 顧問官

(さ) 財政 裁判 裁判官 裁判所 雑報 士官 師範学校 私立 資本金 時間表 社長 主義 出発 出版 巡査 証明書 書記官 指令 人種 新聞 新聞社 政治家 政治学 製造所 請願書 全権公使 卒業生

(た) 退学 体操 太陽暦 大使 大隊長 代理公使 談判 中隊長 中立国 注文 懲役 敵陣 鉄道 電気学 電気線 電信 天文学 電話 透徹 投票 特命全権公使 土曜日 独立権

(な) 日曜日 認可

(は) 博覧会 発行 文法 保護国 報告書 傍聴 募集 発起人 本署

(ま) 民事 木曜日 目的

(や) 郵便 郵便局 郵便船 予備兵 洋服

(ら) 領事館

「両方に出現する語」: 16語

演説 国外 国民 時間 住民 証書 商業 進歩 宣告 大学校 大統領 中学校 独立国 分析 文明 文明開化

以上、日本製漢語を見てみたが、日本語を受け入れる方法²⁵として、日本製漢語229語の中では、日本の漢語を韓国字音の語として受け入れたものは228語、日本の混種語を韓国字音の語として受け入れたものは「株式」1語であった。李漢燮(1985a)によれば、『西遊見聞』(1895)の日本製漢語290語のうち「見本」1語が混種語の例として見られるという。この時期においては漢語を字音の語として受け入れる方法が主であったのであろう。一方、混種語を字音の語として受け入れた例は数少ない例として面白い。混種語は1900年代に入ってから和語とともに大量に入るようになる。

5. おわりに

以上、19世紀末における同形漢語を対象として韓国に受け入れられた日本製漢語の実態について調査研究を行った。その内容を簡単にまとめると次のとおりである。

①近代最初の国語教科書である『国民小学読本』(1895)と日本への留学生によって刊行された『独立新聞』(1896)における漢語3621語のうち、同時期の日本語の資料に見られる同形漢語は、2393語で66.0%を占めている。そのうち同義漢語は約90%台である。

②同義漢語の2290語について各語の出自判断をした結果、「中国製漢語と思われる語」は1906語で83.2%、「日本製漢語と思われる語」は229語で10%を占めている。日本製漢語229語を、受け入れる方法に着目すると、漢語→韓国字音の語がほとんどで、混種語→韓国字音の語として受け入れた例は「株式」の1例のみであった。

以上のように本稿をまとめてみたが、数多くの問題点が散在している。本稿は1895・6年を中心に調査したが、現代語との繋がりを見るためには、通時的な視点を入れて語彙調査を行い、その変遷過程を考察する必要がある。また、その変遷の要因を明らかにするためにさらなる語誌的研究を進めなければならない。

今後、このような研究を進めてゆき、漢字文化圏における日・韓・中の語彙交流の問題に発展させることを目指したい。

注

- 1 「日本製」とは、日本で造語されたものを指す。特に幕末・明治以降、西洋文明・文物が入り、それに対する概念を翻訳する際に日本人が新しく造語したり、中国の古典語に新しい意味を附与したりしたものを意味する。次に「漢語」とは、漢字で表記され、また表記できる語を意味する。韓国語においては漢字を訓読する方法がないので、漢字で表記できるものは漢語になる。ただし、音訳語などは除くことにする。
- 2 通信使の日記、『扶桑録』(1617)に「侯老麻伊」(振る舞い)「時麻」(島)などが、日本語の教科書、『捷解新語』(1676)には「案内」「御馳走」などが見られるという。
- 3 熊谷明泰(1991)から例をあげると以下のとおりである。日本語に「하다(する)」を付けて用言化させて用いている。
 - ・오하랴 끝으머리 하나가 자마나나루 (camaninaru) 하지요 (むしろ、端の一つが邪魔になります)
 - ・참 고와이 (kawai) 해요 (本当にこわいです)
 - ・떡 아이마이 (aimai) 합니다 (とてもあいまいです)
 - ・앗사리 (assari) 하개 단념 하겠 습니다 (あっさりと断念します)
- 4 国語(韓国語)を文字どおり純粹かつ正しい言語にすることで、むやみに取り入れた日本語を排除しようとした運動である。1948年6月2日に文教部から『우리말도로잡기』(国語取り戻し)という小冊子が刊行された。
- 5 ホテル－호테루 (hoteru), タクシー－타쿠시 (takkusi), ペンキー－뽕끼 (penki) など。
- 6 李漢燮(1984 a, 109-110)は次の理由を上げており、①②が主な理由であるとする。
 - ①日本語と韓国語がそれぞれ中国から同じ語を受け入れたからである。

- ②韓国語が日本語から漢字表記語を受け入れたからである。
- ③日本語が韓国語から漢字表記語を受け入れたからである。
- ④偶然の一致。
- 7 表1において李漢燮(1984a)の同形語の数値は、漢語のみであり、2635語は和語(172語)と混種語(14語)をプラスしたものである。ところが、全部合計すると2636語になり、計算間違いかと思われるが、ここでは原文のとおりにしておく。
- 8 在日韓国留学生会編(1978)『在日韓国人留学生博士録』によるもので、李漢燮(1987)からの孫引き。
- 9 福沢諭吉の『西洋事情』の影響を受けたという。詳細は李漢燮(1985a)を参照されたい。
- 10 韓国学文献研究所編(1977)『韓国開化期教科書叢書1』亜細亜文化社 ソウル、を利用した。
- 11 『韓国開化期教科書叢書1』の解説による。
- 当時学部で編纂刊行した教科書は、このような甲午改革(甲午更張)の基本精神である自主独立や歴史的主体性を、教育を通して実現しようとした実証的な資料であり、変貌する世界情勢、時事、科学など近代的知識の普及と受容に力点をおくために、当時の政府要人だけでなく全知識人が参与して刊行した…。(訳と傍点は筆者)
- 12 主題の分け方は裴相満(1983)によったが、同論文での「生活(13課)、思考(1課)、読書(1課)、忠孝(1課)」を「教育」の分野としてまとめた。
- 13 『独立新聞 1～6』(1976)韓国文化開発社 ソウル、を利用した。
- 14 李光麟(1979)『韓国開化思想研究』, 177, 一潮閣
- 15 論説主題による分類は、松斎文化財団(1976)『独立新聞論説集』松斎文化財団出版部、による。
- 16 連体詞型の接辞かどうかの判断は難しいが、既存の語彙調査・先行論文である国立国語研究所(1953, 1959)、野村雅昭(1978)を参照した。
- 17 ただし、『国』が一般の国語教科書の内容と異なることもあって、現段階では、新聞と教科書という資料面の相違点なのかどうかは、よく分からない。教科書の調査範囲を広げて考えるべき課題であろう。
- 18 調査方法は沈国威(1994)、李漢燮(1985a)を参考にした。
- 19 表4において、○と×は、それぞれ用例の有と無を意味する。『漢語大』の初出文献の示し方は、「著者名(生没年)著書名 成立年」の順になっているが、わからないものは書かなかった。また、用例の出現状況によって、上から『大漢和』に用例があるもの』『漢語大』と『英華』・洋学書に用例があつて、初出例が日本のそれより早いもの』『日本の用例が早いもの』の順に類別した。網掛けは日中の資料において相手の国の用例より早いことを意味する。
- また、該当する語を取るにあたって、「衛生」「会社」などのように日本製漢語としてよく知られている語、「愛国心」「意見書」などのように中国の用例がなく日本の用例しか見当たらない語は、できるだけあげないことにした。しかし、後者の場合は、出自判断において一つのパターンを形成しているため、その例として「液汁」をあげた。「医員」は出自判断の保留の例としてあげた。
- 20 中国の洋学書の調査には、佐藤亨(1983)(1986)の詳細な調査があり、これを参考にした。
- 21 蘭学書の調査は佐藤亨(1980)(1983)(1986)を参考にした。
- 22 『漢語大』の初出例の年代が分からないときは、作者の生年を基準として考える。しかし、「会員」のように作者の生年が、日本の例(『文明論之概略』1875)より早い場合、その差が10年以内であれば、日本の方が早いと認める。作者が10才までは、著作活動がほとんどできないとみなした

結果である。

また、「学期」は、洋学書の『德国学校論略』(1873)に「就学の期限」の意味の用例として現れるが、『独』の「一学年を区分したものの一つ」の意味と異なる。

23 李崇寧(1965)『天主教神父의 韓国語研究에 對해서』『亜細亜研究』(高麗大学校亜細亜問題研究所) 18

24 筆者は日本の用例より中国の『六合叢談』(1857)のほうが早く中国製漢語と判断したが、『漢語外来詞詞典』では日本製漢語と判断している。現段階では『六合叢談』(1857)より早い日本の例は見つからず、中国製漢語とする。

25 日韓の語彙交流の歴史において日本語を受け入れる方法として以下のものがあげられる。

1 和語→日本語音(うさぎ, さら), 2 和語→字音読み(組立, 入口), 3 漢語→日本語音(無鉄砲), 4 漢語→韓国字音(自由, 哲学), 5 混種語→韓国字音(見本, 株式), 6 日本經由外来語→日本語音(テレビ, サイダー), 7 日本經由外来語→韓国字音(倶楽部), 8 日本製英語→外来語音(デットボール, マイカー)

参考文献(注にあげたものは除く)

- 荒川 清秀(1997)『近代日中学術用語の形成と伝番—地理学用語を中心に』白帝社
- 郭 永喆(1998)『韓国開化期教科書における漢字語研究—「漢字語使用実態」の調査及び「日本語の関与に依る漢字語」の確定を中心に—』『日本研究』(国際日本文化研究センター紀要) 17
- 熊谷 明泰(1991)『解放前朝鮮語に対する日本語の言語干渉』『日本文化研究』(韓国外語大学校日本文化研究所) 6 ソウル
- 国立国語研究所(1953)『国立国語研究所報告 4 現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語』秀英出版
- (1959)『明治初期の新聞の語彙』秀英出版
- 佐藤 喜代治(1971)『国語語彙の歴史的研究』明治書院
- 佐藤 亨(1980)『近世語彙の歴史的研究』桜楓社
- (1983)『近世語彙の研究』桜楓社
- (1986)『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社
- 塩田 雄大(1999)「日本・韓国・中国の専門用語—日本語とはどのくらい似ているか—」『国文学解釈と鑑賞』64-1 至文堂
- 志部 昭平(1987)「朝鮮語における漢字語の位置」『日本語学』VOL 6-2, 明治書院
- (1989)「漢字の用い方(韓国語との対照)」『講座日本語と日本語教育』9 明治書院
- 徐 在克(1970)「開化期外来語と新用語」『東西文化』(啓明大学) 4 ソウル
- 沈 国威(1994)『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容—』笠間書院
- 杉本 つとむ(1998)『杉本つとむ著作選集 2 近代日本語の成立と発展』八坂書房
- 宋 永彬(1993)『分類語彙表』による日韓基本語彙の対照『早稲田大学大学院文学研究科紀要 文学・芸術編』別冊20
- 曹 喜澈(1991)「日韓同形漢語の語義・用法の相違」『日本近代語研究』(近代語研究会) 1 ひつじ書房
- 宋 敏(1979)「言語の接触と干渉類型について—現代韓国語と日本語の場合—」『聖心女子大学論文集』10 ソウル
- (1985)「朝鮮通信使の日本語接触」『語文学論叢』(国民大) 5 ソウル
- (1988)「日本修身使の新文明語彙接触」『語文学論叢』(国民大) 7 ソウル

- (1989) 「開化期新文明語彙の成立過程」『語文学論叢』(国民大) 8 ソウル
- (1990) 「語彙変化の様相とその背景」『国語生活』22 ソウル
- 張 元哉 (2000) 「日韓異形・異義漢語から同形・同義漢語への変化—近代以降の日本製漢語を中心に—」
『日本語研究』(東京都立大学) 20
- 鄭 大均 (1993) 『日韓のパラレリズム—新しい眺め合いは可能か—』三交社
- 鄭 旼泳 (1993) 「国語漢字語의單語形成研究」忠北大学校博士学位論文 ソウル
- 田 光鉉 (1992) 「近代国語에 대한 基礎的研究 (I)」『韓国語文1』韓国精神文化研究院 ソウル
- 野村 雅昭 (1978) 「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告61 電子計算機による国語研究IX』
秀英出版
- 裴 相満 (1983) 「開化期国語教科書에 관한 考察—初等教育用을 중심으로—」高麗大学教育大学院
修士論文
- 飛田 良文他 (1986) 『明治のことば辞典』東京堂出版
- 宮島 達夫 (1967) 「現代語いの形成」『国立国語研究所論集3 ことばの研究3』(『論集日本語研究15
現代語』に所収)
- 森岡 健二 (1991) 『改訂 近代語の成立—明治期語彙編—』明治書院
- 李 漢燮 (1984a) 「日韓同形の漢字表記語彙」『日本語学』VOL 3-8 明治書院
- (1984b) 「現代韓国に入っている日本語—日本で一部または全部が訓読みされる語を中心に—」
『語文』(大阪大学) 44
- (1985a) 「『西遊見聞』の漢字語について—日本から入った語を中心に—」『国語学』141
- (1985b) 「韓国語に入った日本語」『国語語彙史の研究』6 和泉書院
- (1987) 「『西遊見聞』에 받아들여진 日本의 漢字語에 대하여」『日本学』(東国大学校日本学
研究所) 6 ソウル
- (1993) 「現代韓国語における日本製漢語」『日本語学』VOL 12-7 明治書院
- (1998) 「朴泳孝の建白書に現れる日本漢語について—近代における日韓両語の出合いを探る
ため—」『国語語彙史の研究』17 和泉書院
- 高 名凱他 (1984) 『漢語外来詞詞典』上海辞書出版社 (沈国威(1994)に所収)

調査資料 (日本資料)

- 『日本国語大辞典』(小学館, 1974)
- 『牛店雑談安愚樂鍋』(仮名垣魯文, 1872) 国立国語研究所 (1974) 『国立国語研究所資料集9 牛店雑談
安愚樂鍋 用語索引』秀英出版
- 『浮雲』(二葉亭四迷, 1887), 『あひびき』(二葉亭四迷, 1888), 『めぐりあひ』(二葉亭四迷, 1888), 『に
ごりえ』(樋口一葉, 1895) 『CD-ROM版 新潮文庫明治の文豪』新潮社1997
- 『舞姫』(森鷗外, 1890) 菊田紀郎編(1980・81) 「舞姫一・二」『国語語彙史の研究』1・2 和泉書院
- 『たけくらべ』(樋口一葉, 1895) 轟岡昭夫編(1992) 『たけくらべ総索引』笠間書院
- 『学問ノスゝメ』(福沢諭吉, 1872) 進藤咲子編(1992) 『学問ノスゝメ本文と索引』笠間書院
- 『(続) 世界商売往来 (補遺)』(橋爪貫一, 1872・73) 飛田良文他(1982・85・88) 「世界商売往来用語総
索引」『国語語彙史の研究』3・6・9 和泉書院
- 『早字引集』(1870), 『開化節用字集』(1875), 『雅俗節用集』(1878), 『大全早引節用集』(1880), 『早
引節用集大全』(1891) 『節用集大系』大空社1995
- 『新令字解』(1868), 『漢語字類』(1869), 『音画兩引大全漢語字彙』(1875), 『初学必須大全漢語字書』

(1876), 『必須熟字集 卷上・卷下』(1879) 松井栄一他編(1995) 『明治期漢語辞書大系』 大空社
『郵便報知新聞』(1877.11~1878.10) 国立国語研究所(1959) 『国立国語研究所報告15 明治初期の新聞
の用語』 秀英出版
『英和对訳袖珍辞書』(堀達之助, 1862) 杉本つとむ(1981) 『江戸時代翻訳日本語辞典』 早稲田出版会
『和英語林集成』(ヘボン, 初版1867) 飛田良文他編(1996) 『和英語林集成 初版 訳語索引』 笠間書院
『和英語林集成』(ヘボン, 再版1872), 『和英語林集成』(ヘボン, 三版1886) 山口豊編(1997) 『和英語林
集成 第三版 訳語総索引』 武蔵野書院
『附音挿図 英和字彙』(柴田昌吉・子安峻共編, 1873)
『哲学字彙』(井上哲次郎, 1881) 飛田良文編(1979) 『哲学字彙 訳語総索引』 笠間書院
『漢英対照いろは辞典』(高橋五郎, 1888), 『言海』(大槻文彦, 1889~91), 『日本大辞書』(山田美妙, 1892~
93)
『医語類聚』(1873), 『薬品名彙』(1874), 『物理学術語和英仏独対訳字書』(1888), 『工学字彙』(1888),
『数学ニ用ル辞ノ英和对訳字書』(1889), 『鉤物字彙』(1890) 森岡健二編(1985) 『明治期専門術語集』
有精堂

付 記

本稿は国語学会平成10年度秋季大会(九州大学)で口頭発表したものを大幅に修正・加筆したものである。投稿後、『日本語科学』の査読者の方から多大な御教示を頂いた。記して感謝の意を表す。

(投稿受理日: 1999年9月10日)

(改稿受理日: 2000年3月8日)

張 元哉 (Chang WonJae)

東京都立大学大学院

192-0397 東京都八王子市南大沢 1-3 国際交流会館119

ori@bcomp.metro-u.ac.jp

A Study on the use of Nihonkango in the Korean Language in the late 19th century

—Focusing on forms of Kango which were the same in Japan and Korea—

CHANG WonJae

Graduate student, Tokyo Metropolitan University

Keywords

The late 19th century, Japanese and Korean vocabulary borrowing,
Ratio of Same Forms, Nihonkango

Abstract

Although previous researchers have noted that forms of Kango (words borrowed from Chinese) which are the same in modern Korean and Japanese derive from Nihonkango (words created from Chinese words in Japan) which were adopted into Korean from Japanese, but there has been little research on how this actually came about. In this paper I investigate the frequency in use of Kango and Nihonkango when Nihonkango were introduced in to Korean for the first time.

Based on an analysis of the first textbooks (Kokumin shogaku dokuhon) and newspapers (Dokuritsu shimbun) issued from 1895 to 1986, I found that ; 66.0% (2393 words) of the total 3621 Kango words used in these textbooks and newspapers were the same forms of Kango as those used in Japan at that time. I validated the usage of 2290 words with the same meaning in various materials in China, Japan and Korea, and found that 10% (229 words) of these words were Nihonkango at that time.

These results suggest that there is a need for a more detailed factor analysis in order to understand the close relations between Kango and Nihonkango in Japan and Korea in the late 19th century.